

中学校進学前の不安への対処行動に関する 記述データによる研究

——小学校6年生時の記述と中学校1年生時の回想との比較——

中 島 義 実¹⁾

大 西 彩 子²⁾

原 田 克 巳³⁾

要旨：小学校6年生時の中学校進学前の不安と、中学校1年生が回想した中学校進学前の不安のそれぞれに対して、どのような対処を子どもたちが考えるのか、記述データを対象に、KH Coder 3を用いたテキストマイニングによる対応分析を行った。中島ら（2022）で得られた共起ネットワークにおける抽出語の回答傾向にしたがって調査協力者にクラスター分析を行い、各クラスターを外変数として、回答された対処行動からの抽出語との対応関係を検討した。小学校6年生においては、気軽に頼ることができる対人関係が得られるかどうかに対する不安が高い児童たちは個人志向性の高い対処行動、低い児童たちは社会志向性の高い対処行動を考える傾向があり、それぞれの自覚を活かしつつバランスをとる予防的支援の必要性が考えられた。中学校1年生の結果については進学前の児童に対するチェック事項として用いることができ、全体に対して習慣づけを図るべき事項と、児童個人々の状況に添った補強点を見出し、必要な指導を行うために使うことができる事項とが見いだされた。

Key Words: 中1ギャップ、不安への対処、テキストマイニング、対応分析、予防的支援

問題と目的

「中1ギャップ」に関する諸研究において、中学校への進学に伴う不安に関する実証的研究にはある程度の蓄積（小泉，1995；澤田・古川，1996；草野・上地，2002；南ら，2011；千島ら，2019等）があるが、子どもたちが直面する具体的な不安の細目についてのそれは乏しく、筆者らはあらためて小学校6年生と中学校1年生の記述データからテキストマイニングによる共起ネットワークの分析を行い、進学前の不安および進学後に回想した不安の構造と推移についての実証的知見を得たうえで、「中1ギャップ」に対する予防的支援への具体的提言を行った（中島ら，2022）。

しかしながら、より実践的な、子どもたちにとって成長促進的な予防的支援を行うには、子どもたちの直面する不安だけでなく、それに対してどのような対処

を子どもたちが考えているのかということに沿ったものであるとのお望ましい。本人自身の思いにある「対処行動」を軸とする支援によって「対処主体」を育てることが、「よりよい未来」に向かう主体を強める（神田橋，1990：1997；光本，1997等）。しかしながら従来の予防的支援に関する実践的研究は佐々木（2014）や門原ら（2020）のように既成の技法の応用であったり、千島ら（2019）のように海外で効果がみられたプログラムや文部科学省の答申類にヒントを得たものであったりなど、予防的支援の内容そのものが児童生徒の実態を捉えたデータによって企図されたものではない。児童生徒一人ひとりを主体として育てていく意味からも、児童生徒が進学前不安に対してどのような対処行動を考えているのか、あるいは考えてきたのかについて、実証的に明らかにする必要がある。

そこで本研究では、中島ら（2022）で明らかとなった進学前不安に対して、中学校進学直前の児童はどの

1) 福岡教育大学教育学部教授

2) 甲南大学文学部教授

3) 金沢大学人間社会研究域准教授

ような対処行動を考えるのか、また、中学校進学後の生徒はどのような対処行動をしておけばよかったと考えるのか、について検討することを目的とする。その際に、どのような進学前不安をもつ子どもがどのような対処行動を考える傾向にあるのかという点を対応させて明らかにすることを目指す。

方法

調査協力者 中島ら(2022)で協力が得られたA市の公立小学校2校の6年生138名、および公立中学校4校の1年生327名。

手続きと倫理的配慮 本研究はA市の諮問会議において倫理的な問題がないことが確認され、その責任下で調査が行われた。

調査協力者には、無記名の質問紙を配布した。記述内容と個人とが特定されることはないこと、回答は任意であり、回答の有無や中断、記述した内容によって個人に不利益が生じることは一切ないことを書面で説明し、かつ、実施時に学級担任より口頭でも説明を行った。

調査内容 中島ら(2022)で記述を求めた中学校への「進学前不安」(中学校1年生には回想で記述を求めた)に関して、以下の教示を用いて記述を求めた。
小学校6年生 あなたが「中学校に行ったらこういうことが心配だ」の問いに書いた5つの心配ごとは、それぞれあなたがどんな力をつければ、なくすことができると思いますか(小学校6年生が考えた進学前不安への対処行動)。

中学校1年生 中学校に入学するまでに「こういうことができるようになっておけばよかった」ということはありますか。5つ書いて下さい(中学校1年生が回想した進学前不安への対処行動)。

分析方法

まず、小学校6年生、中学校1年生それぞれについて、上記の教示で得られた対処行動に関する記述データをマイクロソフトエクセルシートの各行に1回答者分ずつ入力した。その際に、「せんばい」などの平仮名表記や「先ばい」などの漢字平仮名混合表記を「先輩」のように漢字表記に揃える処理、ならびに「声をかける」と「話しかける」のような同一内容の表現を「話しかける」という同一語に揃える処理を行った。

そのうえで、各調査協力者を進学前不安のパターンによってグループ分けするために、以下の手順でクラスター分析を行った。まず、中島ら(2022)で得られ

た進学前不安に関する共起ネットワークにおける各々8つのサブグラフ(得られたサブグラフの数は、小学校6年生データ、中学校1年生データともに8であった)について、それぞれに属する語が解答に含まれるかどうかをスコア化した。すなわち各調査協力者に8つのスコアを設け、各サブグラフに属する語を解答していれば1点、解答していなければ0点とした。このスコアの値を変数として、階層クラスター分析を行い、調査協力者を分類した(ユークリッド平方距離を用いたWard法)。

各クラスターに分類符号を振り、これを前述のエクセルシートに外部変数として加えてデータファイルとし、樋口(2004)が作製・公開している計量テキスト分析ソフトウェアKH Coder 3(Ver 3. Beta. 05)による対応分析を行った。対処行動に関する記述内容からの抽出語に対して、クラスター符号を外部変数とする対応分析である。前処理にあたっては、小学校6年生のデータでは、「話しかけ/仲良/起き/関わ/自分から/すすんで/今から/こつこつ」の8語を指定し、中学1年生のデータでは「言葉遣い/仲良/すすんで/よく」の4語を指定した。

結果

小学校6年生が考えた進学前不安への対処行動

小学校6年生の進学前不安に関するクラスター分析の結果をTable 1に示す。

Table 1 小学校6年生の進学前不安に関するクラスター分析結果

クラスター	該当するサブグラフ	N
A	—	18
B	02 (04を含む者多数)	5
C	05 (04を含む者多数)	13
D	04, 08	5
E	04	58
F	04, 07	5
G	04, 01か03	12
H	04, 05, 06 (01等を含む者多数)	10
I	04, 06, (01を含む者多数)	12

これを外部変数として小学校6年生が考えた対処行動からの抽出語のうち頻度が上位60位までの語を対象とした対応分析を行った。分析では最小出現数を3とし、原点付近を係数3に指定して拡大する調整を行い、バブルプロット表示を行ったものがFigure 1である。

なお、各クラスターの特徴を捉えるには中島ら

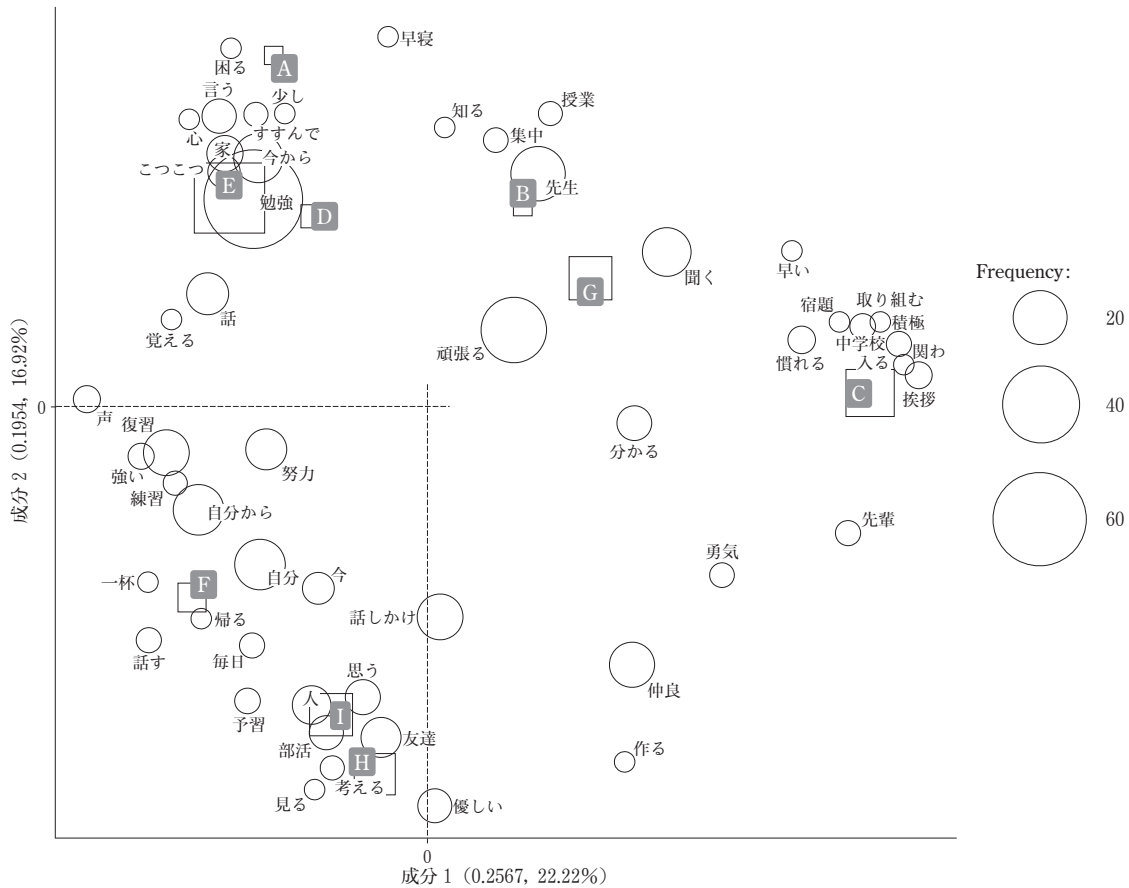


Figure 1 小学校6年生の進学前不安クラスターと対処行動頻出語の対応分析結果

Table 2 小学校6年生の進学前不安に関する頻出語共起ネットワークのサブグラフ

サブグラフ番号	属する主要語	中島ら（2022）で考察された特徴
01	小学校、新しい、教科、英語、宿題、多い、新しい、忙しい	進学後に新しくなる学習や生活の具体的な様子を、今の小学校生活と比べて想像することで感じる不安
02	苦手、算数、数学、スカート、遅刻	小学生である現在苦手な具体的事項を意識した不安
03	試験、成績、授業、先生	中学校で変化する学習の形式や成績評価への不安
04	勉強、部活、友達、出来るか、ついていけるか、難しい、心配	進学前不安について周囲と会話するときの「定番」の話題（抽出語の出現頻度が他のサブグラフを圧して高い）
05	先輩、上下、関係	先輩との上下関係に対する不安
06	違う小学校、来る、人、仲良く	違う小学校から進学してくる同級生と仲良くできるかという不安
07	帰宅、夜、道	帰宅時刻が遅くなり夜道を歩くことへの不安
08	自分、中学校、行ける	中学校でやっていけるかという漠然とした自意識の高まりによる不安

(2022) で得られた共起ネットワークにおける各サブグラフの特徴を参照する必要があるため、それらについて、Table 2 に示した。

クラスター A は、進学前不安のどのサブグラフに属する語も回答していないか、無回答の者が大多数であり、具体的な進学前不安を意識する度合いが低いとみられる。このクラスター A と E とが近い位置にあることが注目される。E は中島ら (2022) において出

現頻度が圧倒的に大きい語からなるサブグラフ 04 に属する語のみを回答しているが、このサブグラフは、「勉強」「友達」「部活」等、中学校進学を意識して周囲と会話するときの「定番」の話題であると考察されていた。定番の話題以外には言及していないということは、特徴的な進学前不安を持っているということではないため、クラスター A と近い位置にあるのも自然なこととみられる。対処行動も「今から」「すすん

で「こつこつ」と「勉強する」というような、「決まり文句」的な語で回答している。クラスターDも近い位置にあるが、Eが回答していたサブグラフ04に加えて08という「中学校でやっていけるだろうかという漠然とした自意識の高まり」とみられる回答をしており、くっきりとした特徴をもつものでないことで位置が近くなったと考えられる。

一方クラスターBは、サブグラフ02, すなわち「小学生である現在, 苦手である事項を意識した不安」に含まれる語を回答した点が共通しており、「先生」との関係で対処していかねばという具体的な主体感をみてとることができる。「授業」に「集中」する、「先生」に（の言うことを）「聞く」というような事項である。これと近い位置にあるクラスターGはサブグラフ04とともに、01ないしは03に属する語を回答した。01は「進学後に新しくなる学習の内容や生活の様子を今の小学校生活と比べて想像したときに感じる不安」, 03は「試験や成績等, 学習の形式・構造・評価法の変化への不安」であり、小学生である現在から変化する具体的事項を意識している点でクラスターBと類似している。まだ見ぬ事項への不安であるだけに「頑張る」というようなやや抽象的な対処を思い描くしかないというところかもしれない。

クラスターCはサブグラフ05である「先輩との上下関係に関する不安」を回答した点が共通しており、「挨拶」を重視し、関係に「慣れ」る、そのために「積極的に」「関わる」という対人的な意識的努力を対処行動として考えていると言えるであろう。「先輩」の語とも近い。

クラスターFはサブグラフ04とともに07, すなわち「帰宅時間が遅くなる」「夜道を歩かなければいけなくなる」ことへ不安を共通して解答しており、すぐに「帰る」ようにする、という語と近い位置にあるのはもっともなことであるが、「自分から」「話す」「復習」「努力」といった、自覚的努力に類する語と近い位置にあることが興味深い。この点についてはクラスターHおよびIと併せて考察できるであろう。この2つのクラスターはサブグラフ06「違う小学校から進学してくる同級生と仲良くできるか」という不安で共通しており、Hはさらに「先輩との上下関係に関する不安」を回答していた。その意味ではクラスターCに近い位置でもよさそうであるが、結果としては「違う小学校から進学してくる同級生」への不安の方が大きく影響していた。そもそもFigure 1は原点付近を拡大したものであり、クラスターF, H, Iは原点に

かなり近接しているとみられる。他のクラスターとの違いは、頼ることのできる気軽な対人関係が得られることへの信頼感であると考えられる。クラスターAからEおよびGは、そのような気軽な対人関係が得られないという心配をもつことが現在についても進学後についても少なく、対処行動も気軽な対人関係を前提に「周りが言うから自分も意識しているという言動をとる」というような周囲との同調性に基づく「決まり文句」的なものとなる、あるいは、「先生」や「先輩」という「気軽ではない重要な人の目」を意識した努力となるとみられる。「社会志向性」(伊藤, 1993)の高い傾向にある一群であるとも考えられる。一方クラスターFからIは、一人で帰宅する不安や違う小学校出身者に対する不安など、安心できる対人関係や頼ることのできる対人関係が得られるかどうかというところに不安を感じやすい。そのために、「自分」が「強く」なり、「練習」や「復習」等の「努力」を「自分から」行ったり、また「自分から」「話しかけ」たり、「人」を「優しい」と「思う」努力をしたり、といった、あくまでも自分自身の対処能力が頼りであり、その力量や対処の成否の評価の基準となる軸も自分自身に属するものであり、不足があれば自身の努力で力量を増そうとする対処行動を考えることが多くなったと思われる。「個人志向性」(伊藤, 1993)の高い傾向にある一群であるとも考えられる。

中学校1年生が回想した進学前不安への対処行動

中学校1年生が回想した進学前不安に関するクラスター分析の結果をTable 3に示す。

これを外部変数として中学校1年生が考えた対処行動からの抽出語のうち頻度が上位60位までの語を対象とした対応分析を行った。

Table 3 中学校1年生が回想した進学前不安に関するクラスター分析結果

クラスター	該当するサブグラフ	N
A	02 (01を含む者多数)	28
B	01, 03	22
C	02, 05 (01, 03を含む者多数)	27
D	01, 05 (03, 08を含む者多数)	16
E	01 (05を含む者多数)	36
F	—	40
G	01	117
H	01, 08	30
I	04 (01を含む者多数)	11

分析では最小出現数を5とし、原点付近を係数3に指定して拡大する調整を行い、バブルプロット表示を

に現状を厳しいものと感じていると考えられる。その意味で対処行動として「予習」という語が挙がり、もっと準備しておけばよかったという気持ちを表しており、「完璧」という語にその切実さをみることができる。

クラスターBはサブグラフ01と03に属する語を回答していた。01は小学校6年生時の進学前不安に関する「定番の話題」に該当するものであるが、03は「今振り返った時、中学校生活が楽しいものになるかどうかと心配していた」という一連の語であるが、「遅刻」を含んでいた。その点で「起きる」という語と近い位置にあるのは自然なことであるが、Figure 2の右辺下方には「早寝」「早起き」を見出すことができる。この相違はどのようなことなのか、クラスターEおよびHと併せて考えねばならない。

クラスターCはサブグラフ02と05に属する語を共通して回答していた。05は「違う小学校から進学してきたクラスメイトと仲良くできるか」という不安と併せて「小学生の時に仲良くしていた同級生と同じクラスになれるか」という不安を回想して回答した語である。進学後に実感した厳しさが、同じクラスに小学生の時から友人知人がいるかどうかで大きく左右されることを実感している生徒たちである。「英語」という大きく変化した教科の重さとともに、「習慣」や「行動」における準備の重さも実感しており、独力でこれに向かわねばならないときの厳しさを実感していると考えられる。

クラスターDの場合、同じくサブグラフ05に属する語を回答したが、他に共通して回答したのが01という「定番の話題」であった。他方で03とともに08をも回答する者が多く、「上下関係」を心配していたと回想したということは、現在でも気になっている可能性がある。その意味で「言葉遣い」や「挨拶」「敬語」の重要性を実感しているのは、他校出身者を気にしていることも含めて自然なことであり、「遅刻」を含む「中学校生活が楽しいかどうか心配」というところから「もう少し」早く「起きる」ことや「体力」をつけておけばよかったという思いに至っていると考えられる。ところで「上下関係」に言及しているサブグラフ08については、クラスターHも共通して回答していた。にもかかわらずDとは図上の位置も大きく異なっており、対処行動として思い描くこともかなり異なっている。この点についてもクラスターHの特徴と対比してみていかねばならない。

そのクラスターHと近接しているのがクラスター

Eであるが、サブグラフ01に属する「定番の話題」を共通して回答しつつ、他のサブグラフに属する語を少なくとも1つは回答しており、特に05のクラスメイトに関する不安をほとんどが回答していた。その点で「定番の話題」のみを回答していたクラスターGと異なり、「友達」をつくることの重みを実感していた。その一方で「早寝早起き」のような決まり文句のような事項や、「……しておけばよかったと思う」という解答に多く用いられた「思う」のように、後悔の意識はあるが能動的対処とは言い難い受動性にも特徴がみられた。近接しているクラスターHはクラスターFと同様に、サブグラフ01の「定番の話題」に加える形で08の「上下関係」を回答していた。同じく「上下関係」を意識していたクラスターDと異なるのは、クラスターDの思いの中心にはまずは05の「クラスメイトへの不安」があったことである。ここでは、気軽な対人関係が得られることへの不安の高低の違いが見いだされた。同級生に関する不安は少ないが、上下関係は意識するというクラスターHが、同級生に関する不安を回答したクラスターEと近接していたのはどのように解されるであろうか。サブグラフ05と08は、実は01と複数の語で共起関係を示しており、語として登場する頻度も他のサブグラフよりも高く、この3つで大きな共起関係にあるとみることもできる。つまり、「定番の話題」である「勉強」「成績」「部活」「友達」「先輩」「先生」などに対する「できるか」「ついていけるか」「仲良くできるか」というものが「自分自身」のパフォーマンスにかかるものである中で、「他者」のうち同級生に対する不安をも「定番の話題」として意識するのがクラスターE、同級生ではなく上下関係への不安を「定番の話題」として意識するのがクラスターHとみることができる。このことから、クラスターEとHはともに、対人関係への対処を意識する点で、「定番の話題」のみを回答したクラスターGと異なるが、回答した対処行動は「早寝早起き」、規則正しい「生活」、「まじめに」勉強しておけばよかった、など一般的な「決まり文句」的なものも多い。

クラスターGは前述のとおり「定番の話題」のみを回答しており、人数も圧倒的に多く、無回答者がほとんどを占めたクラスターFとともに、大きな問題を感じることなく現時点では適応できている可能性が高い。「無い」と最も近接していることからそれがうかがわれる。なお、その周辺に登場する「県」「都道府県」は、直近に学校でそれらに関するテストが行われたことが反映されている。最近のテストに関する

ことが「しておけばよかったこと」として記述されるということは、自分自身や対人関係などについて長期的に気になっていることがほとんどないということであるとも考えられる。

残るクラスターIは、サブグラフ04「給食が多い」を共通して回答しており、対処行動としても「給食」を早く食べきれるようにしておくこと、との回答と近接しているのは自然な結果であろう。

考察

本研究の目的は、中学校進学直前の児童が進学前不安に対して考える対処行動、ならびに中学校進学後の生徒がどのような対処行動をしておけばよかったと考えるのかを検討することであったが、それは「中1ギャップ」に対する予防的支援を具体化するためである。その見地から、分析結果について考察する。

まず小学校6年生の考えた対処行動であるが、クラスターA, D, Eのように「定番的」な事項について進学前不安をもつ児童は「今からすすんでこつこつと勉強する」というような「決まり文句」とみることもできるようなものが主要なものであった。しかしながら、「定番的」で「決まり文句」的な不安であれば、深刻な「中1ギャップ」に陥らないということは言えない。深刻な事項が他にあるのだが言語化が何らかにできない児童や、今は深刻に感じていないが進学してから大きな困難に直面する児童も含まれている可能性がある。小学生であり、学級担任が個人を把握しやすい時点であるからこそ、「定番的」な話題に含まれる学習の現状や対人関係の状況を細やかに把握して、心配な児童には意識付けを行いつつ望ましい習慣を身につけさせることが重要であろう。定番的に語ってしまっている事項を明細化して現状把握と不足点の補充をしておくことが必要となる。

一方クラスターBのように現時点で苦手な事項を強く意識している児童には、「授業に集中する」「先生の言うことを聞く」というような高い意識を評価して支持するとともに、過度に意識して自分を追い込んでしまわないように、息抜きやリラックスなどの手法を教えることも重要であろう。

クラスターGのように、まだ見ぬ中学校の学習構造や評価法に不安をもつ児童の考えた対処行動が「頑張る」というような漠然としたものとならざるを得ないのは致し方ない。中学校見学や出前授業のようなことである程度緩和できるかもしれないが、児童自身が

育つことも重要である。今回のように苦手克服を意識しているクラスターBと近いのであれば、今できることである「授業に集中する」ことなどを習慣づけて、自身の足元を固めていくことが予防的支援になるであろう。

クラスターCのように先輩との上下関係を不安に思い、そのために挨拶をきちんとすることや関係に慣れること、積極的に関わっていくことを意識しているならば、意識としては妥当なものであるため、そのことを支持して安心感をもたせたいと、その意識に働きかける形で対人マナーをチェックしたり、練習したりすることができるであろう。

クラスターF, H, I, のように、中学校進学後に気軽に頼ることができる対人関係ができるのかどうか不安に思う児童が、「自分が強くなる」「自分から努力する、練習する、復習する」「人を優しいと思う」というような自分自身の対処能力を自分自身で評価しながら努力していこうと意識する点はまずは評価してよいであろう。進学後は生活上のあらゆる局面で自ら行動を判断したり律したりできるようになっているかどうかが問われることになるからである(中島ら, 2022)。そのうえでその意識を実践につなげて評価することで自信をもたせることができる。しかしながらこのような個人志向性の高い傾向にあるタイプの子どもの中には、完全主義を伴うことで自責的になってしまうリスクが高い(齋藤ら, 2008)子どもが含まれている可能性がある。その意味で、認知のあり方などをチェックし、必要に応じて緩和を図っておくとよいであろう。また、進学後の対人関係に備えるために、小泉・山田(2011)のようなアセスメントと一体となっている対人トレーニング(「社会性と情動の学習」とされ、8つの社会的能力について学年ごとにテーマと学習プログラムが準備されている。さらに基礎的な認知的能力の弱点が対人関係に影響するような子どもには、宮口[2016]のような認知的トレーニングが適切かもしれない)を行ったり、今既に構築している対人関係の中でのその児童のよさを評価して自信をもたせたりするというような準備も考えられる。

一方中学1年生の考えた対処行動について、まず留意すべきは縦断的に得たデータではないために、小学校の時点でどのような児童だったのかということを考えることはできないということである。

そして、中学校進学後の現在、振り返って「こういうことができるようになっておけばよかった」と思う事項であるという点で、小学生に対する「先輩からの

教訓」というような役割になっていく可能性をもつ。小学校の教員はこのデータをチェックリスト的に用いて弱い点を見出し補強することで予防的支援に役立てることもできるであろう。

そのような意味でまずクラスターAのように進学への準備状況ができていのかどうか心配な児童、準備不足であるのに楽観視が過ぎる児童には、「思っていた以上に中学校生活は厳しいものだった」と感じる先輩もいるということ伝えておくともよいかもしれない。学習習慣については、小学校では定着しにくい予習の習慣を身につけておくこと、そして小学校の学習内容で理解できていない点を確認しておく、といったことが予防的支援となるであろう。

クラスターBのように通学路が遠くなることなどから遅刻が多くなる生徒やクラスターCのように周りに気軽に頼れる友人がいるとは限らず独力で学習や対人関係の新状況に取り組むことに負荷を感じる生徒のことを伝えたくて、生活リズムや学習習慣、対人関係などにおいて自分を律して独力で対処していく力を進学前に養っておく必要性を自覚させ、習慣づけておく必要のある児童もいるであろう。またクラスターDのように上下関係をこなすことに負荷を感じることもあるので、挨拶、敬語などの言葉遣いについての自覚と習慣が必要なケースもある。

クラスターE, H, Gのような「定番」の不安に対する「決まり文句」的な対処行動を想起した生徒が多くを占めたということは、それらが誰もができるようにしておくともいえる。「先輩たち皆が言っていること」として、早寝早起き等の生活リズム、学習習慣、整った文字を書く、計算を正確にできるようにしておく、友人関係を良好にする自分なりの方策を見つけ、バリエーションを豊かにしておく、あるいは対人スキルを身につける、といったことは、学年全体に対する予防的支援として強調することができる。

クラスターIのように給食の多さが負荷となる生徒もいたことについてはどのように考えればよいであろうか。ここに属した生徒は調査協力が得られた中学校4校のうち2校に集中していた。その2校において完食指導が厳しい、あるいは時間割において給食時間が短い、というような個別事情があるのかもしれない。この点について小中学校が連携して状況を把握し合いつつ、中学校の状況を伝えながら、食事の手が止まりがちな児童がいれば、どのような要因でそうなのかを観察し、適宜修正していく必要がある。

以上のように、小学校6年生および中学校1年生のデータを用いることで、具体的な予防的支援を講じていくことができる。支援が具体的データに基づくものとなり、既成のプログラム等を全体に行うよりも、きめ細かな要所を抑えた支援となり得る。いくつかのタイプの児童を想定することができ、またチェックリスト的に個人個人の不足点を見出すこともできるので、児童それぞれが必要としている補強点に手の届くものとなるであろう。

他方でこれはあくまでも、ある時期の、ある地域の小中学生のデータによるものである。特別な教育的取り組みや、何らかに特化して力を入れた教育的取り組みを行っている場合には、異なる結果となる可能性も高い。具体的で簡易な質問を用いた調査でもあることから、あらためて調査を実施して実態をつかみつつ、より適した予防的支援を講じていくことが望ましい。

引用文献

- 千島雄太・茂呂輝夫 (2019). 小中連携による集団宿泊活動が中学校生活への期待と不安に及ぼす効果：不登校傾向に着目して. *発達心理学研究*, 30(2), 74-85.
- 樋口耕一 (2004). テキスト型データの計量的分析—2つのアプローチの峻別と統合. *理論と方法*, 19, 101-115.
- 伊藤美奈子 (1993). 個人志向性・社会志向性尺度の作成および信頼性・妥当性の検討. *心理学研究*, 64, 115-122.
- 門原眞佐子・高木亮・上森宏樹 (2020). 体験活動を通じた小中連携による中1ギャップ予防プログラムの報告—異年齢間ピアサポート活動「中学生と語る会」が小6にもたらす効果検証—. *就実教育実践研究*, 13, 49-57.
- 神田橋條治 (1990). 精神療法面接のコツ. 岩崎学術出版社.
- 神田橋條治 (1997). 対話精神療法の初心者への手引き. 花クリニック神田橋研究会.
- 小泉令三 (1995). 中学校入学時の子どもの期待・不安と適応. *教育心理学研究*, 43, 58-67.
- 小泉令三・山田洋平 (2011). 子どもの人間関係能力を育てる SEI-8S② 社会性と情動の学習 (SEI-8S) の進め方 小学校編. ミネルヴァ書房.
- 草野剛・上地安昭 (2002). 小学校から中学校への移行期における児童・生徒の期待と不安に関する調査研究. *生徒指導研究*, 14, 49-63.
- 南雅則・浅川潔司・秋光恵子・西村淳 (2011). 小学生の予期不安と中学校入学後の学校適応感との関係に関する学校心理学的研究. *教育心理学研究*, 59, 144-154.
- 光元和憲 (1997). 内省心理療法入門 山王出版.
- 宮口幸治 (2016). 一日5分!教室で使えるコグトレ 困っている子どもを支援する認知トレーニング122.

東洋館出版社.

中島義実・大西彩子・原田克巳(2022). 中学校進学前の不安に関する記述データによる研究—小学校6年生時の記述と中学校1年生時の回想との比較. *甲南大学紀要. 文学編*, 173, 145-150.

齋藤路子・沢崎達夫・今野裕之(2008). 自己志向的完全主義と攻撃性および自己への攻撃性の関連の検討—抑うつ, ネガティブな反すうを媒介として. *パーソ*

ナリティ研究, 17, 60-71

佐々木聡(2014). 女子中学校における新入生宿泊行事の実践研究—期待と予期不安に注目して—. *日本教育心理学会第56回総会発表論文集*, 778.

澤田俊和・古川雅文(1996). 中学校への環境移行における学校適応感と期待・不安・目的意識に関する研究. *生徒指導研究*, 7, 70-88.